

【原著論文】

聴覚障害者の親を持つ健聴の子ども (CODA: Children of Deaf Adults) の 幼少時からの通訳体験とその影響について ～手話の習熟度とアイデンティティからの検討

仲野 翠*, 粟村 昭子**

Interpreting experiences of children with normal hearing with hearing impaired parents
(CODA: Children of Deaf Adults) from childhood and its impact
on their sign language proficiency and identity

Midori Nakano and Akiko Awamura

要 旨

本研究の目的は CODA の親子のコミュニケーションのあり方や通訳体験、またそれらが自身のアイデンティティをどのように捉えているのかについて具体的に把握することであった。14名の CODA にインタビュー調査を行い、KJ 法を用いて分析をした。その結果、手話を家庭の中で自然に獲得した手話ネイティブ群と手話を獲得できなかった手話非ネイティブ群に分けられることが分かった。この2群で分析を行ったところ、手話ネイティブ群では、Glickman and Carey (1993) は聴障者のアイデンティティ発達モデルの裏返しを辿っている可能性があること、手話ネイティブ群の方がよりろう者に親しみを感じているが、2群に共通する点として、ろう者とは異なるコミュニケーション方法や文化をもつ健聴者の中に入りにくいと感じていることがわかった。聴障者と健聴者の間で CODA のアイデンティティが揺れ動いていることが推察された。CODA がろう者である親とコミュニケーションをとるためにはどちらの群においても手話を正式に学ぶことが必要であることがわかった。

Abstract

The purpose of this study was to specifically understand the communication patterns, interpreting experiences, and how they perceive their own identity of CODA (Children of Deaf Adults) in a concrete manner. Interviews were conducted with 14 CODA individuals, and the data was analyzed using the KJ method. As a result, it was discovered that the participants can be categorized into two groups: those who naturally acquired sign language within their families (sign language native group) and those who did not acquire sign language (sign language non-native group). Analysis conducted on these two groups revealed that the sign

受付日 2023. 9. 8 / 受理日 2024. 1. 10

*JCHO 大阪病院 / **関西福祉科学大学 心理科学部 教授

language native group potentially follows the reverse of Glickman and Carey's (1993) model of identity development in deaf individuals. It was also found that the sign language native group felt more familiarity with the deaf community, while both groups expressed difficulties in fitting into the hearing community that holds different communication methods and culture from deaf individuals. It is inferred that CODA individuals experience oscillation of identity between the deaf and hearing communities. It became evident that both groups of CODA individuals need to formally learn sign language in order to effectively communicate with their deaf parents.

● ● ○ **Key words** ヤングケアラー youngcarer/聴覚障害者 deaf/コミュニケーション communication/手話 sign language

I. 問題と目的

聴覚障害者（以下、聴障者）の親を持つ健聴の子どものことを CODA (Children of Deaf Adults) と呼ぶ。CODA の国際的な組織である CODA International の HP (2022) によると、CODA は聴障者の親を 1 人以上持つということが定義となっている。すなわち親のどちらかがろう者か難聴者であれば、その健聴の子どもは CODA と呼ばれることになる。

聴障者の心理臨床的支援は、その問題が深刻であるにもかかわらず聴覚障害がコミュニケーションの障害であることから、他の障害よりもかなり遅れて始まった (村瀬, 1999)。しかしその聴障者の健聴の子どもたち (CODA) も大きな心理的問題を抱えていることがわかってきたが、このような研究はまだ緒に就いたばかりである。

CODA の状況を概観すると様々な問題が生じている。中津・廣田 (2020) によれば、アメリカの聴障者の人口調査 (The Deaf Population of the United States, 1974) では、聴覚障害を持つ親から健聴の子どもが生まれる確率は、片親もしくは両親とも聴障者のどちらの場合でも共通して 80% 以上となっており、高い確率であることがわかる。聴障者の親が健聴の子どもを育てる際に様々な問題が指摘されている (たとえば中津ら, 2020; Buchino, 1993)。そのため健聴の子どもは幼いころから、日常的な音声や音環境の情報支援の役割を担うことが多く、それが心理的な負担となっていることがわかってきた。その問題の重大さに比して日本では研究がなかなか進んでいない。海外では

1970 年代から CODA のケースレポートなどが報告され始めている。日本では、筆者が確認できた範囲では 2000 年代から研究がスタートしている (都築, 2006)。また論文数も日本の方がはるかに少ないのが現状である。

日本における CODA の家庭内役割について、中津・廣田 (2020) は 104 例の CODA を対象に調査研究を行った。そこでは親への通訳役割の実態や CODA と親との会話方法について調べている。親子の会話方法では、口話、手話、筆談、身振り、その他の選択肢を複数回答可として調査した結果、手話が 92 例 (88.5%) と最も多くなっているが、口話が 74 例 (71.2%) と続いた。一方で、身振り 71 例 (68.3%)、筆談他 (68.3%) と非定型的な方法が同程度に使用されていた。手話と口話の併用が 62 例 (59.7%) であり、CODA と親それぞれの主な会話法を併用している状況が示された。手話は親側がスムーズに使用できることも多いが、子どもは正式に習う機会がないために、複雑な内容を手話で表現することが難しいのが現状であるとしている。また渋谷 (2009) は、CODA は手話を家庭外で学ぶことで親と対等に会話ができるようになることを指摘しており、CODA が手話を自然に獲得することは難しいとしている。口話は、口を動かしてコミュニケーションを行う (声を出す、出さないは人による) 会話法であるが、その中では「読話」が行われている。聴障者の当事者である脇中 (2014) は「読話」について、唇の動きを読み取る「読唇」だけでなく、会話の流れやその場の状況なども合わせて内容を判断しなければならないために、非

常にエネルギーを要し、かつ、難しいものである、と解説している。つまり、聴障者の親と健聴の子のコミュニケーション手段で手話と口話の併用が一番多い結果となっているが、どちらも十分に使うことが難しいために併用していると言えるかもしれない。場合によっては、身振り、筆談などの多様な会話方法も使用している。このように CODA と親のコミュニケーションはどちらにとっても負担が大きいことが推察される。

中津・廣田の調査では、さらに通訳役割についても調べている。「どんなときに通訳をしてきましたか(複数回答可)」との質問に、来客の対応や外出時の会話、電話、テレビなど様々な状況で通訳を行っているだけでなく、果ては病院や銀行、車購入時の親の代理交渉や学校の三者面談、自分の担任の家庭訪問まであげられていた。つまり子供である CODA が大人的生活圏の通訳まで広範囲の通訳を担っている現状があり、かつそれは日常生活場面で間断なく生じており、CODA への心理的負担の実態が示された。通訳開始年齢は平均で 6.48 歳となっており、5~6 歳が 38.5% と一番多かった。就学前の幼児期からの開始は 61.6% と過半数であり、幼い頃から通訳をしている状況が示されている。青年期にどのくらい通訳をしたのか主観評価で答える質問では“すごくある”、“ときどきある”、“あまりない”、“全くない”の 4 つの選択肢の内、“すごくある”と“ときどきある”の 2 つで 91.3% にもなっている。このように幼い頃から様々な状況下で、高頻度で通訳を行っている CODA だが、主観評価で青年期の親との会話成立度を、“問題なく成立”、“だいたい成立”、“あまり成立しない”、“その他”の 4 つの選択肢で尋ねたところ、“問題なく成立”が 46.2% しかいなかった。幼い頃から通訳を行っているにも関わらず、青年期になっても問題なく会話が成立していると感じている者は半数以下しかおらず、CODA と親とのコミュニケーションが難しい実態が明らかにされている。

海外での CODA の研究を見ると、Buchino (1993) の研究によれば、CODA は通訳、親への感情、役割逆転、親子コミュニケーションに関する 4 つの問題を抱えている、としている。CODA は親とのコミュニケーションには肯定的だが、通訳が頻繁で親が自分を主要な通訳者と見なしていることから通訳役

割に否定的な感情も見られる。加えて、親への感情に怒りや不満があるが、親への忠誠心が強いために他者への相談を難しくしていることを明らかにした。

ところで 鐘 (1990) は、アイデンティティについて、学童期までの理想的な人物への同一化から思春期にかけての自己の探求という変化がみられ、このような自我の発達によってアイデンティティが形成されるとした。また、このプロセスは、エネルギーを要す上に、孤独に耐えなければならないので、プロセスの中で孤独の状態に耐えられない人は、決定ができず「自分」がますますわからなくなる。これを Erikson は「アイデンティティ拡散・混乱の危機」と呼んだ、と説明している。

これを CODA のアイデンティティ形成に当てはめて考えるとき、聴障者のアイデンティティ形成もみておくことは重要と思われる。ほとんどの聴障者は健聴者の両親のもとに生まれ、親子間にコミュニケーションの問題を生じることが多く、健聴者とうろうの文化の間で揺れ動くことが知られている (上農、2003)。同様に CODA もほとんどが聴障者の親の元に生まれ、聴障者の親がそうだったのと同じく親子間のコミュニケーションの問題に直面し健聴者とうろうの文化の間に置かれるからである。Glickman and Carey (1993) は聴障者のアイデンティティ発達モデルについて、ろう者が自らのアイデンティティを獲得するために 4 つの段階を辿ると述べている。まず、第一段階で「健聴者の価値観を無条件に受け入れている段階」(健聴段階)、第二段階に「さまざまな体験から、努力しても健聴者のようになることが困難であることに気付き、自分が誰なのかわからず混乱している段階」(境界段階)、第三段階に「手話とうろう文化という新しい価値を発見し、それに傾倒する段階」(没頭段階)、第四段階に「健聴者、ろう者の双方の文化的価値をともに肯定的に受容し、バランスよく自分のものにすることができる統合の段階」(二文化段階)の 4 段階をあげている。日本では、甲斐・鳥越 (2006) がこのモデルと質問紙を用いてろう学校高等部の生徒にアイデンティティについての調査を行っている。調査では、ろう学校高等部生徒の様相が明らかになり、先の Glickman and Carey のモデルがアイデンティティを理解する上で重要であることを確認している。一方 Lovely and Ando (2018) は、CODA のアイデンティティを特定

の社会集団への帰属意識と CODA が自分を CODA と考える頻度と定義したうえで、成人の CODA 5 人にインタビュー調査をしている。対象者は 24～58 歳と幅広い年齢層の CODA で、2～4 時間のインタビューを 2、3 回行った。その結果、CODA のアイデンティティに影響を与える要因は CODA 自身の手話の流暢さと、両親が重度の聴覚障害を持っているかの 2 つであることが特定された。

本研究の目的は CODA の親子のコミュニケーションのあり方や通訳体験、またそれらが自身のアイデンティティにどのように影響しているのかについて具体的に把握することである。たとえば親による CODA への手話教育の有無が親子関係や CODA のアイデンティティ形成に影響を与えているかもしれない。なぜなら親から手話を教わった CODA は、手話ができ、親とのコミュニケーションや親の通訳に困ることがないかもしれない。先行研究から手話を教えられた CODA は教えられなかった CODA よりも手話が堪能であることが予想され、自尊感情が損なわれる経験が少なかったり、アイデンティティが獲得しやすくなったりするかもしれない。

その一方で CODA の家庭内での通訳役割は幼少期から始まり、生活の中で常に行っているため、彼らは正に今問題となっているヤングケアラーと言える。この通訳体験が彼らにどのような影響を及ぼしているのかについても検討したい。

日本では CODA に関する研究がほとんどされていないことから、本研究が CODA への心理的援助の一助に資するものとなると考える。

II. 方法

1. 調査の手続き

聴覚者当事者団体や CODA 自身にメールなどで調査参加者の募集を行った。調査は zoom を用い、オンラインでインタビューを行った。調査期間は 2022 年 9 月 30 日 (金)～同年 11 月 30 日 (水)であった。なお、本研究の趣旨と、倫理的配慮 (プライバシーの保護、回答拒否・中断・撤回の意思表示が可能であることなど) について、募集およびインタビュー時に紙面と口頭で説明し、同意の得られた者にインタビュー調

査を実施した。なお研究実施に際して、関西福祉科学大学研究倫理審査委員会の承認を得た (承認番号 22-02)。

2. 調査対象者

14 名の CODA の応募があり、全員から同意を得られた。14 名の分析対象者の基本属性は次の通りである。男性 6 名 (42.9%)・女性 8 名 (57.1%)、年齢は 20 代 2 名 (14.3%)、30 代 3 名 (21.4%)、40 代 5 名 (35.7%)、50 代 4 名 (28.6%) であった。当事者団体の所属については、所属している者が 12 名 (85.7%)、所属していない者が 2 名 (14.3%) であった。

3. 質問項目

質問項目は Knight (2018) などいくつかの論文を参考に大学教授と検討して決定した。Table 1 に記載している 15 項目を半構造化面接にて尋ねた。時間は 1 人につき 30 分から 90 分程度であった。

III. 結果と考察

まず、Table 1 に示した 15 の質問項目についての面接結果を、KJ 法に準じて意味内容による分類を行った。KJ 法を行う際には、臨床心理士・公認心理師の資格をもち 20 年以上の臨床経験のある大学教授 1 名と検討をした。

「CODA という言葉を知ったきっかけ」は「ろう関係の人から」が 10 名 (71.4%) と一番多かった。「CODA を知ってからの変化」では「仲間」が 5 名 (35.7%)、「特になし」が 4 名 (28.6%)、「違和感」が 3 名 (21.4%)、「CODA との距離がある」が 2 名 (14.3%) に分けられた。「CODA のコミュニティに参加したきっかけ」は「CODA に誘われて入った者」が 7 名 (50.0%)、「自主的に調べて入った者」が 5 名 (35.7%)。「CODA のコミュニティに参加したあとの変化」では「仲間、共感ができた」が 6 名 (42.9%)、「視野の広がり」が 3 名 (21.4%) などに分けられた。

1. 対象者の分類と比較

「親は積極的に手話を教えていたか」という質問への語りをグループ化してみると、親から手話を教わっ

Table 1 インタビューでの質問項目

質問項目
〈CODA との出会い〉 CODA という言葉を知ったきっかけ。 CODA を知ってからの変化。
〈CODA のコミュニティ〉 CODA のコミュニティに参加したきっかけ。 CODA のコミュニティに参加したあとの変化。
〈CODA との相談〉 成人するまでに CODA と会って相談したり、されたりした経験について。ない人はそのような機会が欲しかったか。
〈手話通訳での体験〉 手話通訳でのネガティブな経験。 手話通訳でのポジティブな経験。 祖父母と親との通訳を行ったことがあるのか。
〈親との会話〉 親は積極的に手話を教えてくれたのか。そのことに対してどう思っているのか。 何歳ごろから親とスムーズに会話ができるようになったか。
〈アイデンティティ関連〉 今までに「ろう者になりたい」と思ったことがあるのか。 今までに、健聴者の中に入ることが「怖い」と思ったことがあるか。 今まで周りの人から、親が聴覚障害者であることを悲観的に見られたり、軽んじられたりした経験があるのか。 小さいころから親を手伝ってきた経験が現在の性格や対人関係などに影響していると思うのか。
〈その他〉 最後に CODA として伝えたいことはあるか。

たというグループ（2名、14.3%）と、教わらなかったというグループ（5名、35.7%）の外に、当初想定していなかった「いつの間にか自然に手話を獲得した」とするグループ（7名、50.0%）の3つに分かれた。最後のグループは、具体的には「教えてもらうっていうか身についた」「会話の中で自然に身についた」「教わったという感覚はなく、家の中の言語は手話だった」などの回答で、これを手話を母語としているとし、手話ネイティブ群と名付けた。一方「教わった」と回答した者は機会があるときにエピソード的に教わった程度であった。つまり先行研究とは異なり、手話を親から「教わった」CODA は母語の日本語を身につけた後、親より手話を学んでおり、手話が十分に使えなかったことも確認できた。これと「教わらなかった」とした CODA と合わせて手話が第二言語であるとみなして、手話非ネイティブ群と名付けた。この群は前者よりも明らかに手話習熟度が低かった。結果として手話ネイティブ群は7名（50.0%）、手話非ネイティブ群は7名（50.0%）であった。

2群には明らかに手話の習熟度に差があることから、幼少時からの手話通訳経験にもこの差が関係していることが想定された。そこでこの2群間でインタビュー内容を比較検討することにした。

(1) 手話通訳での経験について

① 手話通訳でのネガティブな経験

手話ネイティブ群において、手話通訳でのネガティブな経験は「ない」と答えたのは2名（14.3%）だけであった。具体的な内容として「親が起こした交通事故交渉の通訳」「小さい頃に銀行などでよくわからないまま通訳したこと」など個別の体験が語られたが、「親族との通訳」での経験をネガティブな経験とした者が2名（14.3%）いた。いずれも大人同士の社会的な立場・場面での通訳であり、しかも親が非難されている場面も含まれる。幼い、あるいは未成年の子の立場では精神的に厳しいものがあっただろうと想像された。

一方、手話非ネイティブ群でもネガティブな経験は多く語られた。「(通訳で) 伝えるに良かった、伝わらなかったこと」「クレジットカード会社や聞こえない家族員が起こした交通事故の相手方との電話通訳」「(社会制度に関する内容で子どもである自分には理解できず、わからないまま通訳したために) 質問の意味・意図が伝わらない」「(大人同士のトラブル時に双方の通訳をしてろう者への) 差別に関する発言まで通訳させられた」などさまざまな体験が語られた。ネガティブな体験は「ない」とした者は3名（21.4%）で、そのうち、2名（14.3%）はそもそも手話ができず、親と

のコミュニケーションも難しかったので通訳経験自体がないとのことだった。すなわち手話非ネイティブ群で手話通訳ができる者はそもそも7名のうち5名しかおらず、そのうち4名がネガティブな体験をしていたことになる。

以上まとめると、両群共にほとんどの者が通訳でネガティブな体験をしていた。ただ手話ネイティブ群は手話通訳が習熟しているため、買い物や少しの日常会話などだけでなく、多くの社会的場面で通訳をするようになる。そのため非手話ネイティブ群よりも困惑や傷つきがあるようであった。交通事故交渉や親族間での決め事など、CODAの年齢と解離した社会的場面で通訳をさせられることも多かったようだ。そして内容が理解できないまま通訳したがうまくいかず失敗体験として経験されたり通訳の中で親を差別する発言を直接言われ、親と相手との板挟みになってしまうなど、通訳に伴うさまざまなネガティブな体験が語られた。

それに対して手話非ネイティブ群でも似た体験はあるものの、手話ネイティブ群よりも手話通訳自体が拙くて通じなかった、など通訳そのものの失敗体験を語る者が半数ほどいた。手話通訳において、非手話ネイティブ群は手話ネイティブ群よりも簡単な手話通訳しかできなかったことが年齢不相応な社会との対峙を避けられたと考えられる。このように手話通訳能力の差が手話体験にそのまま反映されていることがわかった。つまり手話ネイティブ群の方が親と相手の語られる内容がわかるだけに心身の葛藤や傷つきは大きい可能性がある。

②手話通訳でのポジティブな体験

手話ネイティブ群の手話通訳についてポジティブな体験は「ライブでの通訳と一緒に楽しむことができた時」「うまく伝わったみたいに感じた時」と7名のうち2名(14.3%)だけが通訳としての達成感についての体験が語られた。

手話非ネイティブ群では2名が手話通訳経験がない。残る5名のうち4名(28.6%)がポジティブな体験があると報告した。「家庭訪問でも手話通訳していたので学校の先生が考えていることが分かった」「卒業式の答辞を手話を付けてした」「良い手話通訳士と出会えたこと」「手話サークルに足を踏み入れたこと」

などであり、手話通訳そのものというよりはそれによって得られたものについての個人的な体験が語られた。

以上をまとめると、手話ネイティブ群は手話非ネイティブ群よりも手話通訳体験でポジティブな体験をもつものは少ないようであった。そして手話ネイティブ群と手話非ネイティブ群どちらも個人的で多様な体験が語られたが、ポジティブな体験がある者のうち、手話ネイティブ群の方が手話通訳経験そのものの充実感をあげているのに対し、手話非ネイティブ群では手話通訳の結果得られたものに満足していることが相違としてあげられるかもしれない。

③親と祖父母の通訳について

親である聴障者はまたその親である祖父母とコミュニケーションが取れていたのかを確認するために、「あなたの祖父母と親との通訳を行ったことがあるのか」という質問に対しての語りを中心に検討していった。

手話ネイティブ群では、「ある」と答えた者が6名(42.9%)、「ない」と答えた者が1名(7.1%)であった。ないと答えた者は「小さなときは少しあったけど、祖父母が亡くなるのが早かったからそんなに記憶にない」と語り、経験が全くないということではなかった。「ある」とした者は、「祖母から母親への悪口を言えと言われて、悪口言ってるぐらいしか言えなかった。」「祖父母が近所に住んでいたため、結構頻繁に行き来があった。けれど、少し複雑な話だと通じなくなり、通訳をしていた。日常的な話もあまり通じていなかった。祖父母は全く手話ができなかった。父はすごいかわいがられていたけど、孫の私から見ても全く通じてなくて。祖父母はあんまりそれに気づいてないっていうか、気づいてたと思うんですけど、それがずっとやったから不思議に思ってたのか。」「両方の祖父母とも近くに住んでいて、全員手話ができなかったため、親戚づきあいは全部通訳しないといけない」「同居だったので毎日。兄が父を、私が母みたいな感じで役割分担していた」「毎日。親は私をそんなに頼りたくないようだったが、祖母からやると言われることが多かった。」「祖父母は手話をしなかったため、頼まれて通訳することがあった」と高頻度で通訳している様子が見えた。

一方、手話非ネイティブ群は「ある」者が1名

(7.1%)、「ない」者が6名(42.9%)であった。「ある」者の語りとしては、「(両親は)口話教育時代だから、祖父母は全く手話ができない。口話教育では『手話使わない=家でも使わないでください』だったから、親兄弟も使えなくて当たり前みたいな感じ。通訳しないと会話が成り立たない」というものがあった。「ない」者の語りとしては、「祖父母と両親は通じ合っていたと思う」「祖母も耳が聞こえないためなかった」「両親と祖母のほうで過ごしてる時間が長いので、なんとなく意思是伝わってたのだらうと思う」という親と祖父母が通じていたという語りがあるが、そのうち2名(14.3%)は「そもそもの会話量はすごく少なかった」という語りもあった。祖父母が早くに亡くなったためなかったという語りがあるが、兄がしていたという語りがある。会話内容をきちんと理解していたかどうか不明な点もあるが、親と祖父母とはお互いに強い信頼関係で結ばれていることが感じられる語りとなった。

あいまいな部分もあるが、手話ネイティブ群より、手話非ネイティブ群のほうで祖父母の通訳経験者が少ないと思える結果となった。手話非ネイティブ群では通訳経験者は少なかったが、親と祖父母がコミュニケーションがスムーズに取れていたであろうと思われる語りは2名しかいなかった。祖父母と親とのコミュニケーションの問題が改めて示される結果となった。

(2) 親との会話

「何歳ごろから親とスムーズに話せるようになったのか」という質問に対しての語りを中心に検討した。

手話ネイティブ群では、7名中6名(42.9%)が6歳ごろまでにはスムーズに話せていたようで、「スムーズに会話できなかったことがない」といった回答が多く見られた。1名(7.1%)だけ「10歳ごろから話せるようになった」という回答があったが、それ以前も親の言うことは理解できていたとのことだった。

手話非ネイティブ群では、7名中1名(7.1%)のみ「7歳ごろ」という回答があり、2名(14.3%)が10代、2名(14.3%)が20代後半、2名(14.3%)が今でも話せないという結果であった。「7歳ごろ」「12歳以降」としたCODAは、通訳の回数が増えて慣れたからといった主旨の回答であった。「16歳ごろ」とした人は、「親・通訳から離れたから」といった趣旨の

回答であった。「母と20歳ごろ、父とは34歳ごろ」「28歳ごろ」と答えたCODAたちは「手話を学んだあとから」話せるようになったということであった。したがって手話非ネイティブ群では一定の年齢になるまではスムーズに話ができなかったが、多くは小学生以降になって手話を学び話すことができるようになったということが分かった。

以上から、当然ではあるが手話ネイティブ群の方が幼い頃から自然に会話できていたことがわかる。

しかし、手話ネイティブ群の6歳ごろまでスムーズに会話できていたCODAのうち2名が、「小さなころから会話はできていたが、思い返すと手話通訳講座で学び始めてから自然に話せるようになった」と回答した者がいた。CODAの手話の習熟度には想定以上に様々な段階があるようであった。あるいは「スムーズに会話できた」というスムーズさの基準にも個人差があることが考えられる。そして、手話非ネイティブ群にも2名「手話を学んでから会話がスムーズにできるようになった」と回答した者がいた。これらの回答の詳細は不明であるが、家庭内では身振りやその家庭だけで通じるホームサインなども多いだろう。年齢が進むにつれて親子のやりとりは抽象的であったりより複雑な内容となるが、それを手話でやりとりするためには健聴者に日本語の学びのための「国語」の授業があるのと同様に、ろう者に手話言語を一つの言語科目として年齢に合った語彙を学び、使えるようにすることが必要であることを改めて考えさせられる。

上記のように「2名が手話を学んでから話せるようになった」、としたが、そのほかの人は詳細は分からない。推測ではあるが話し言葉(日本語)を使いこなせるようになって初めて手話という彼らにとっての母語以外の言語もわかるようになった、とも考えられるかもしれない。

以上、まとめると手話ネイティブ群ではある一定の年齢まで(多くが小学校に入学するまで)自然に話せたが、手話を習うようになってよりスムーズに話せるようになったようだ。逆に手話非ネイティブ群の方は、ある一定の年齢以降(小学校頃)から話せるようになったと感じているようだ。「スムーズに話せるようになったのはいつか」という質問の仕方だったので「スムーズに話せる」ことへのイメージに個人差があったのかもしれないが、手話の習熟度が高いネイテ

イブ群は年齢が上がり複雑な話をするころになると家庭で学ぶ手話だけでは対応が難しくなったとも考えられる。一方、手話があまり上手でなかった手話非ネイティブ群は逆に日本語での表現が豊かになってくると手話言語も母語以外の言語としてわかるようになるのかもしれないと考えられた。繰り返しになるが、手話というマイナーな立場にある言語を使いこなすためには、家庭だけでなくどこかで正式に学べるようにサポートすることが大切であると考えられる。

(3) アイデンティティについて

アイデンティティについての聴障者の先行研究を参考にすると、CODAも聴障者と健聴者のアイデンティティとの間で揺れ動いていることが予想された。そこでCODAのアイデンティティとして「ろう者になりたいと思ったことがあるのか」、「健聴者の中に入ることが怖いと思ったことがあるか」という質問に対しての語りを中心に検討していった。

①ろう者になりたいと思ったことがあるか

まず、「ろう者になりたいと思ったことがあるのか」という質問に対しての回答は、手話ネイティブ群では、「ある」が3名(21.4%)、「ない」が4名(28.6%)であった。ある者の語りとしては、「聞こえなくても自分はろう者でありたいという感覚があった」「聞こえないと通訳をしなくてよくなるし、聞こえない両親が大好きだったから、聞こえない世界の中で完結したらどれだけ楽か、楽しいかと思っていた」「小さいときから自分はろう者だと思っていたが、5、6歳の時に私は聞こえているから両親とは同じにならないと気付いて残念だった」などの語りが見られた。ない者の語りとしては、「(ろう者になっても)メリットがないし、今のままでもろう者のコミュニティに入れるから」「自分の係の仕事(手話通訳)ができなくなるので思ったことがない」などの回答があった。その中で、「手話で話す方が気楽な感じはある。しゃべって居心地がいい」という者もいた。したがって「ない」と答えたものも「手話」が母語としてあり、ろうとしてのアイデンティティが基本にあることが感じられた。

手話非ネイティブ群では、「(ろう者になりたいと思ったことが)ある」は1名(7.1%)だけで、「ない」

が6名(42.9%)であった。ある者の語りとしては、「自分の中では向こうの世界の人(健聴者)、こっちの世界の人(ろう者)という2つの世界の間にいると思っていた」というものであった。「ない」と答えた者の語りとしては、「今の状態よりも不都合が多いし、しんどそう」「苦勞してる親をみて自分もなりたいたは思わなかった」「手話は親との話のスキルってだけだった。小さいときに他のろう者やCODAとのかかわりがあれば変わったかもしれないけど」というものであった。

手話非ネイティブ群よりも手話ネイティブ群のほうが「ろう者になりたい」と思ったことのある者が多かった。手話非ネイティブ群では、ろう者になりたいと思ったことがない人がほとんどであり、手話を親との会話のための道具としてみているだけであったり「親と一緒にいる状態になりたくない」というような、親と一定の距離を置いているような語りが見られた。つまり手話ネイティブ群は現在は不明だが一時期はろう者と強く同一視していたことがわかる。非ネイティブ群ではそれはみられなかった。これは先に紹介した Glickman and Carey (1993) による聴障者のアイデンティティ発達モデルのまさに裏返しを手話ネイティブ群はたどっているように見える。

②健聴者の中に入るのが怖いと思ったことがあるか、

および親が聴障者であることを悲観的に見られたり、軽んじられたりした経験があるか

まず、「健聴者の中に入ることが怖いと思ったことがあるのか」という質問に対しての回答は、手話ネイティブ群では、「ある」が5名(35.7%)、「ない」が2名(14.3%)であった。ある者の語りとしては、「聞こえない親の子どもという目線がある気がする。その目線が付きまとうことに恐怖というか違和感」「小さなころから祖父母が毎日来ていたし、0歳から保育園に行って聞こえる世界があった。けど、小学校高学年ぐらいから自分が他の人と違うっていうか、マイノリティ感を感じていた。親のことが共有できないから」といった、聞こえない親がいることによってなじめないという感覚を感じる者が2名いたが、彼らは親の方つまり聴障者の方に身を置いているように感じられる。「親が裁判に巻き込まれて、通訳をしていた時に間違っはいけないというプレッシャーに押しつぶ

されそうになった。聞こえる人の中に入るとそのレーダーが働く。今でも、聞こえる人との会話だと本当の私じゃないような気がする」「頭の中で聴者って怖いとか、どんなことを思ってるのかわからないとか、ろうのことを理解してくれないだろうとか、私のことはどう見てるのかなとか考える。ろうの関係者じゃないとを感じる」「声でわーっとたくさん話しているのが怖い。聞こえる人のテンポで情報を処理できない。日本語で思考ができなくて、一回映像に直さないと」などコミュニケーション方法や文化の違いを感じている者が3名(21.4%)いた。ない者の語りとしては、「小さなころから聞こえる子どもたちと遊んでいたからなかった」「両親以外はみんな聞こえる人だったので、両方の世界を行ったり来たりしながらという感覚だった。どっちがいいとかはない」といった語りであった。ろう者の方に身を置いているがゆえに聴者が怖いと感じたりする一方で、ろう者と同じように聴者にもなじんでいて怖くない、とするものがあり、幼少期の環境の大切さが感じられる。

一方、手話非ネイティブ群では、「ある」が4名(28.6%)、「ない」が3名(21.4%)であった。ある者の語りとしては、「今でも複数人の中に入るのに抵抗がある。気を張らないと入れないし疲れる。聴者の会話のスピードについていけない時がある」とコミュニケーション方法や文化の違いを感じている者が1名いた。「手話サークルに違和感を感じる。手話サークルに入っていない関係ない人の方がよっぽど垣根がない」「マイノリティの人の立場に意識のない人たちの中に入るというのは、自分の感覚の中で違うなというのはよくあった。最近は怖いというより、自分のこだわりというか、感覚が違うのかなと思う」など聴障者が軽んじられていると感じる場所に入りたくないという3名の語りがあった。ない者の語りとしては、「兄弟がいたから思うことがなかった」「祖父母と関わっていたから思うことがなかった」などがあった。

手話ネイティブ群でも手話非ネイティブ群でも共に健聴者の中に入ることが怖いと思ったことがある人数は、半数以上になった。手話ネイティブ群の中には、2名が聞こえない親がいることによって周囲の視線を意識せざるを得ず健聴者の中でなじめない感覚を得ている者がいた。2群の共通点として、手話ネイティブ群には3名、手話非ネイティブ群には1名コミュニケ

ーションの方法や文化の違いを感じて怖さを感じる者がいた。ない者は両群に共通して聞こえる祖父母や遊び仲間などの聴者と小さなころから関わってきた経験があった。ろう文化への親和度という点では手話ネイティブ群も手話非ネイティブ群も差はないと言えるのかもしれない。同様に健聴者の文化や視点への馴染みにおいても同様のことが言えるだろう。

③親を手伝ってきた影響

CODAは通訳という特殊な役割を担うため、影響を確認するため「小さいころから親を手伝ってきた経験が現在の性格や対人関係などに影響していると思うのか」という質問に対しての語りを中心に検討していった。ポジティブな影響とネガティブな影響にグループ化ができた。

手話ネイティブ群では、ポジティブな影響が3名(21.4%)、ネガティブな影響が4名(28.6%)であった。ポジティブな影響があった者の語りとしては「親は耳が聞こえないだけで、コミュニケーションが取れば聞こえは障害にならない」「手話に対する肯定感が強くて、私は手話の人なんだという自己肯定感につながった」「他の障害を持つ人にも興味を持つようになった」というものであった。ネガティブな影響があった者の語りとしては「人に頼れない」「周りの目を過敏に気にする」「自分のことを後回しにしてしまう、意思がないとよく言われる」「自分の意思を伝えるのが苦手。子どもの時からずっと通訳をしてきた。そこに自分の感情や考えは入れられないので、自分という人間だけで誰かに接したときにこういう時って何て言えばいいんだろうとか、うまく言えないとか。通訳だったら親が発してそれを通訳したらいいだけなのと思う」というものであった。

手話非ネイティブ群では、ポジティブな影響が2名(14.3%)、ネガティブな影響が4名(28.6%)、手伝いをしていない者が1名(7.1%)であった。ポジティブな影響があった者の語りとしては「ろうの友達ができるのと人間関係に幅が広がった」「通訳するとなると、事前にその人が何を伝えたいか聞いたりもするし、自分で考えたり、それをどうやって伝えていくかなどを考える。そんな経験からどんなことに困るのか想像したり、先に行動したりとか、事前に動こうという気持ちが芽生えた」というものであった。ネガティ

ぶな影響があった者の語りとしては「本心とは違うことを言ったりヨイショしたりしてしまう」「親が聞こえないからできないと思われるのが悔しくて頑張っていたのが自分にもあって、馬鹿にされたととらえてしまうことがあった。自分が（親と同一化して）過小評価されていると感じてしまう」「周囲の方の表情がかなり気になる。親が怒らないように表情を見ていたので、そういう目でずっと周りを見てたら変化がわかるようになった」「一歩踏み込んで親しくなれない、距離を取ろうとしている自分がある。逆に親しくなると全部過度に行っちゃうという傾向があるかもしれない。あと、親を守らなければという義務感と不安感を感じていた」というものであった。

「親を手伝ってきたこと」とは通訳のことである。「手話通訳での経験」についての質問では語られなかったことが、「小さいころから親を手伝ってきた経験が現在の性格や対人関係などに影響していると思うか」という質問では意外にも多くの率直な語りを引き出すことができた。両群ともにネガティブな影響をあげていた人の方が多かった。2群の語りをまとめると、まず手話ネイティブ群のポジティブな影響として親の障害受容や自己肯定感の獲得、障害者全般への視野の広がり感が各1名ずついた。手話非ネイティブ群では人間関係や思考に幅が出たことや洞察力を獲得したことなどをあげるものがあった。一方、ネガティブなもの共通点としては、通訳は両者の話すことを「正確に伝える」作業であり、それを生活の中で幼少期より長期間、しかも頻繁にしてきたことから、対人関係での心理的な距離の取り方に難しさを感じるようになっていたことがわかった。同時に通訳は他者の考えをそのまま伝えなければならないことから、自分の感情を押し殺す習慣がついてしまっ、自分の意志や考えがわからなくなってしまうことなども共通して語られているようである。そのような影響を受けていると思われる語りは、手話ネイティブ群には2名(14.3%)、手話非ネイティブ群には1名(7.1%)いた。具体的には手話ネイティブ群の「自分のことを後回しにしてしまう、意思がないとよく言われる」「(通訳では)自分の感情や考えは入れられないので自分という人間だけで誰かに接したときにこういって何て言えばいいんだろうとか(思う)」という発言がまさにそれであろう。手話非ネイティブでは少しわかりに

くいが「一歩踏み込んで親しくなれない…(中略)…親しくなると全部過度に行っちゃう」などがそうではないだろうか。親を手伝ってきた体験から来た認識されていることからこれも該当すると思われる。また親を含めた人の視線(顔色)が気になることも通訳などに関連したものと考えられているようで、手話ネイティブ群で1名(14.3%)、手話非ネイティブ群で2名(28.6%)いた。各群内というよりは両群で共通するものが見られたようである。

IV. まとめ

1. 手話通訳での体験

手話通訳でのポジティブな体験は、各群に共通するものはなかった。ポジティブな体験は少ないことから、個性が高くなっているのではないかと考えられる。次に、手話通訳でのネガティブな体験は交通事故での通訳(2名、14.3%)や親族との通訳(2名、14.3%)が共通して語られた。その他、親族との通訳でのネガティブな体験や主に聴者からの差別的な発言など手話通訳に伴う出来事によってもネガティブな経験をしているようであった。しかし、手話非ネイティブ群では手話通訳がうまくこなせなかった経験をネガティブな体験としている結果となった。どちらもネガティブな体験ではあるが、両者質の違ったことを体験しているようである。手話の習熟度の違いが要因として考えられ手話ネイティブ群の方が精神的なダメージは大きい可能性がある。

2. 親、祖父母など3世代におけるコミュニケーション

手話ネイティブ群ではほとんどの者が幼いころから親と会話をスムーズにすることができていたが、手話非ネイティブ群では10代以降に会話できた者がほとんどで、今でも会話できない者が2名いた。やはり、手話を自然獲得できると幼いころから親との会話はスムーズにできるようであった。しかし、着目したい点として、手話ネイティブ群にも2名「手話を学び始めてからスムーズに話せるようになった」と回答した者がいたところが挙げられる。幼いころから手話でスムーズに話せていると思っ、大人になって手話

を学んでからスムーズに話せるようになったと感じる者がいることがわかった。安東 (2022) は、「聞こえない親から手話を継承していても、家庭内の手話の広がり限界を感じるコーダも」おり、その要因が「手話による言語資源が日本語に比べて圧倒的に不足している」ためであるとした。CODA は家庭内でしか手話を見る機会がなく、学習の場がないため手話の質の担保が難しくなり、様々な話をするのが難しいと考えられる。手話の学習の場が CODA には必要なのではないだろうか。そして、それに気づくことができない要因の1つとして、親と祖父母のコミュニケーションがあるのではないかと考えられる。祖父母と親の通訳を経験した者は半数もおり、祖父母と親の通訳を経験していない者で祖父母と親がスムーズにコミュニケーションをとれていたと思われる語りは2名しかおらず、中には「母親と祖母は情緒的な話や相談はしていなかったみたい」と語る者もいた。これらから、親も祖父母とスムーズにコミュニケーションを取ることが成長した後もできておらず、そのために親が子どもである CODA とコミュニケーションをうまく取れていない事実気づいていない可能性が考えられる。そして、CODA も親とのコミュニケーションが幼いころからできていないがそれに気づかず、手話を学んで初めて気づく者がいるのではないかと考えられた。手話ネイティブ群にもそのような者がいるかもしれないし、手話を学んだことのない非手話ネイティブ群の中にはさらに多くいるかもしれない。これらの背景として、「オーディズム (Audism: 聴能主義)」が存在していると思われる。安東 (2022) は「音声言語優位な社会では手話は社会的に地位が低く、聞こえない親は手話の価値を低く見てしまい、手話継承の意義を見出せない」ことから、親も CODA に手話を教えるのをためらい、CODA も手話を学ぶ機会を公私両面から阻害されることで、親子間コミュニケーションの不全感につながっているということを考察している。本研究でもはっきりと確認することはできなかったが、生じている可能性はある。なぜなら親が手話は教えないと決めているという語りがあったからである。また現在では手話や聴障者、CODA をテーマにしたドラマや小説などが多く見られるようになったが、本調査の CODA の幼少期を過ごした時代はそうではなく、聴能主義の影響は大きかっただろう。

3. CODA のアイデンティティについて

「ろう者になりたいと思ったことがあるか」「健聴者の中に入ることが怖いと思ったことがあるか」という質問の語りを中心に検討した。聴障者と健聴者のどちらに親近感をもっているのかを調べれば「どちらのアイデンティティをより強くもっているのか」わかるだろうと考えたからである。ろう者になりたいと思ったことがあるのは手話ネイティブ群では3名、手話非ネイティブ群では1名いた。そのうち各群1名ずつ、「自分がろう者だと思っていた」「ろう者の世界の間人だと思っていた」といった回答が見られた。ろう者により親近感を持っているのは手話ネイティブ群の方のようだが、ろう者との同一視には手話を自然獲得したかどうかという要因はあまり関係ないようであった。

「健聴者の中に入ることが怖いと思ったことがあるか」という問いには、手話ネイティブ群では5名、手話非ネイティブ群では4名と半数以上となり、こちらは二つの群であり差がみられない結果となった。そのうち手話ネイティブ群では3名、手話非ネイティブ群では1名で、コミュニケーション方法や両者の文化の違いによって健聴者の中に入るのが怖いと思ったことがあると答えた者がいた。この4名のうち、自身のみが家族の中で健聴者であった者が3名、健聴の兄弟がいた者が1名であった。健聴者と関わる機会が少なかったことが関係しているかもしれない。手話ネイティブ群の聞こえない親がいることによってなじめないと感じている者2名と手話非ネイティブ群の聴障者が軽んじられていると感じる場所に入りたくない者3名は怖いというより、違和感があるようだった。

以上のことから、「ろう者になりたい」とよりろう者に親近感を持っている者は手話ネイティブ群の方に多かったが、「健聴者の中に入るのが怖い」と健聴者と距離を感じている点においては2つの群にあまり差がないという結果となった。Leigh et al. (1998) では CODA について「より聴者であり、ろう者ほどろう者ではない。しかし、ろう者と比べて、どちらの文化にも属することができない」と述べられており、手話言語を獲得できたかどうかに関わらず、CODA にはろう者にも健聴者にも所属しづらいアイデンティティの揺れがあり、それらが表れているのではないかと考察した。

4. 親との関係について

「でもね、反抗しても頼んでくるっていうのはわかっていて。(中略) …やりたくないって言ったら、絶対困るのがわかってたので」「親が聞こえないということ色んなことをしなかった(中略) …仕事で重要なことを任されても親のことを優先で考えてた。」「・通訳になるのをやめようかと思ったときもあったが、母にお父さんがあなたに期待してるんだからと言われたときに、もうなるしかないんだと思った」「親の手伝いなんか逆にしたくなかったし、しなかったの。だけど、心のどこかでは困るのはわかってる。その繰り返し」など4名、親の手伝いなどを断れないといった回答をしている者がいた。「手伝いをやらなければやらなかったで罪悪感が来るので。葛藤。頼まれる度。今は解消された。(中略) …手話通訳の経験も重ねてきて、できることはしてもらおう、なんでもかんでもやればいってもんじゃないというところを学んできて」「親を守らなければいけないという義務感と不安感を感じていた。お互い頑張っている中で助け合うはいいと思うが、甘え合うはちょっと違うなど。簡単に甘やかさないようにというか、手を出したりしないように、お互い自立していけるように思っている。」と2名、断れないという考えから変わった者がいた。CODAはヤングケアラーになりやすいと思われるが、村上(2022)は、聴覚障害者の母を持つCODAをヤングケアラーの一例としてあげている。そこではCODAが障害を持つ母の苦しみを知っているからこそ、母におせっかいを積極的に働きかけてしまう。しかし「～なってしまう」といった語りから強制されている面もあると考えられ、主体性を奪い取るような気づかいを強いられているという。児童虐待で見られるようなはっきりとはわかりにくいあいまいさがヤングケアラー全体に存在していることが述べられていた。本研究でも過剰な心配をしてしまう点では当てはまっていると考えられる。ただそこから抜け出して「できることはやってもらおう」と開き直れた語りも2例あった。なぜ考えが変わったのか要因まで探ることはできなかったが、今後、CODAの支援を検討するためにさらなる研究が必要だと思われる。

5. 本研究の問題点と限界、今後の展望

まず、第一に調査対象者の偏りが考えられる。CODA群は、9割弱がCODAの当事者団体であるJ-CODAに所属している者であった。結果にはその点がある程度影響しているかもしれない。J-CODAでは勉強会なども行っているため、CODAに対して理解があり、造詣が深まっている可能性が考えられる。今後は、J-CODAに所属していない、CODAという言葉さえ知らない者に調査していく必要があるだろう。

次に、親とスムーズに会話できるかどうかの想定が筆者と調査対象者で想定が違った可能性である。筆者は齟齬なく会話ができ、情緒的な話までできることをスムーズな会話と想定していたが、齟齬なく通じることだけをスムーズな会話と想定しているような回答が見られた。その齟齬なく通じること、という基準も曖昧であったかもしれない。またCODAと親の会話が情緒的な会話ができている実態に当事者自身が気付いていないケースも想定しておくべきであった。

今後の展望として、今回の調査結果では、CODAのアイデンティティの揺れについて要因がはっきりしなかったため、より詳細な要因の探求が必要であると考える。そして、その結果を基にCODAのアイデンティティ発達が助長されるように、幼いころからの支援を検討することが急務である。CODA同士でないと体験の共有が難しいことから、CODA同士が子供時代から出会える機会を提供していく必要があるのではないだろうか。CODAが子ども時代に聴障児だけでなく健聴児とも自然に遊べる環境を用意すること、本研究でも先行研究でもCODAが幼少時より常時通訳することが弊害となっていることがわかったため、親にもそれを周知したり、公共の手話サービスを使えるような環境をより整えることが望まれるだろう。さらに聴障児や若いCODAと一緒に手話を学べるような環境も必要なのではないだろうか。両者には継続して年齢に応じた手話言語を学ぶ機会の提供が必要と考えられる。

【参考・引用文献】

- 安東明珠花 (2022). コーダの手話継承 コーダ同士の語りからの分析・考察. 言語文化教育研究, **20**, 59-73.
- Buchino, M. A. (1993). Perceptions of The oldest hearing child of deaf parents, *American Annals of the Deaf*, **138**(1), 40-45.
- CODA International.Messages from the Founder & President. <https://www.coda-international.org/milliebrother> (2022-06-18 参照).
- Glickman, N. S. & Carey, J. C. (1993). Measuring Deaf Cultural Identities: A Preliminary Investigation. *Rehabilitation Psychology*, **38**(4), 275-283.
- 上農正剛 (2003). たったひとりのクレオール：聴覚障害児教育における言語論と障害認識. ポット出版
- 甲斐更紗・鳥越隆士 (2006). ろう学校高等部生徒のアイデンティティに関する研究. 特殊教育学研究, **44**(4), 209-217
- Knight, T. (2018). Social Identity in Hearing Youth who have Deaf Parents. *International Journal of Business and Social Science*, **9**(9), 1-12.
- Leigh, W. I., Marcus, L. A., Dobosh, K. P., & Allen, E. T. (1998). Deaf/hearing Cultural Identity Paradigms: Modification of the Deaf Identity Development Scale. *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, **3**, 329-338.
- Lovely, E., & Ando, A. (2019). Invisible Bilingual and Bicultural Groups in Japan, *Inter Faculty*, **9**, 139-161.
- 村上靖彦 (2022). 「ヤングケアラー」とは誰か 家族を“気づかう”子どもたちの孤立. 朝日新聞出版, pp.155-193.
- 村瀬嘉代子 (1999). 聴覚障害者の心理臨床. 日本評論社.
- 中津真美・廣田栄子 (2014). 聴覚障害の親をもつ健聴の子ども (Children of Deaf Adults: CODA) における親からの心理的自立時期の長期化の要因. 音声言語医学, **55**, 130-136.
- 中津真美・廣田栄子 (2020). 聴覚障害の親をもつ健聴児 (Children of Deaf Adults: CODA) の通訳役割の実態と関連する要因の検討. *Audiology Japan*, **63**, 69-77.
- 渋谷智子 (2009). コーダの世界 手話の文化と声の文化. 医学書院.
- 都築繁幸 (2006). 聴覚障害の母親と健聴児との相互交渉に関する事例的考察. ろう科学教育：聴覚障害児教育とその関連領域, **48**(1), 1-22.
- 鍾幹八郎 (1990). アイデンティティの心理学. 講談社現代新書.
- U. Halbreich (1979). Influence of deaf-mute parents on the character of their offspring. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, **59**(2), 129-38.
- 脇中起余子 (2009). 聴覚障害教育 これまでとこれから コミュニケーション論争・9歳の壁・障害認識を中心に. 北大路書房.